

# BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学経営大学院 教授

## ウォール街の告白ブーム

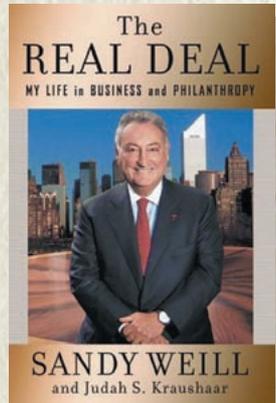
世紀のテールメイカー、カリスマCEO

この秋学期シカゴ金融街のビジネススクールで教えている。アメリカの金融は一〇年周期でバブル、破綻、スケープートの摘発、引き締めを繰り返す。当地では今、投資銀行家の一九九〇年代後半のゴージャス・バンキングに対する反省の書がベストセラーになっている。その代表が、著名テレコムアナリストReingold's "Confessions of a Wall

Street Analyst」と、メディア業界投資銀行家 Knees' "The Accidental Investment Banker" である。八〇年代後半のLBOとインサイダー事件の時は、多くの新聞雑誌記者によるノンフィクションがベストセラーになっていたが、今回は当事者自身の告白の書が多い。そんなことを考えていたところ、このところの大変革の渦中のアメリカの金融界を代表するカリスマ経営者による自伝の傑作が発売された。本書は、

筆者がこの二〇年間読んできたアメリカビジネス書の中で一番面白い。

本書が面白いのは次の点だ。①ウォール街のこの二、三〇年の歴史が、その人間模様と共に最大の制度変革を行った当事者により語られる。②アメリカの金融業の現場がどのような原理で経営されているかがよく分かる。③悩みながら仕事中毒といわれるほど働き、さまざまナリスクをとり、仲間を大事にしながら時には裏切るという、そこでのリーダーシ



**The Real Deal**  
My Life in Business and Philanthropy  
Sandy Weill and Judah S. Kraushaar  
Warner Business  
2006/10

がまさにその通りである。「アメリカでは金銭的に成功することは、神の認められた成功の証しである」。

サンディ・ワイルとはどういう人物か  
サンディ・ワイルはワレン・バフェット、ジャック・ウェルチと並び、その経営する会社の株主価値を二六倍にもした米国で最高の実績を持つ経営者である。ワイルはブルックリンのユダヤ系移民中産階級の家生まれ、苦学してコーネル大学卒業後、ベア・スターンズ社のメ

ップの実態が、経営者本人の率直な告白として聞ける。④なぜ彼らが株主中心の原理を大事にするのか、多額の報酬を求めると、利益追求の行き過ぎに対する歯止めはどこにあるのか、最後になぜ社会貢献に行き着くのか、このあたりの日本では理解しにくいところがよく分かる。⑤孤独な経営者には妻が共同経営者だということがよく分かる。

一九世紀のフランスの哲学者トクビルはアメリカを訪ねて次のように言った  
ツセンジャーを振り出しにウォール街に就職する。二七歳で小規模の株式ブローカーを設立し、その後次々と業績の低迷する名門金融機関を小が大を呑む形で買収し成功を収めることとなる。ワイルの金融機関経営の原則は現場主義の業績向上にあり、買収した企業のコストを徹底的に節約し、役に立たない買収先の幹部や従業員は解雇する一方で、利益に貢献する忠実な部下は家族のように大事にする。九〇年代

な難局に直面するたびに常に現場に戻り、素早い決断、忠実な幹部への信頼で、的確な問題への対応をしていく百戦錬磨の経営者としての姿が見えてくる。「市場が好調なとき知らず知らずのうちに金融機関は行き過ぎに陥るが、どこかで潮目が変わる。そこで経営者は大きく舵を切り、問題に的確に対応しないと大変なことになる。結局は経営の最大のリスクは企業と自分の評判である」といっているのは率直な告白である。